こんにちは牛越です

【第183回】

人口の動きに光が

大町市長
牛越 徹

今年も残すところひと月となりました。今年の秋は一直線に涼しくなり、10月末の北アルプスの初冠雪が根雪になりました。

今年を振り返りますと、10月に5年に一度の国勢調査がありました。結果の発表は先になりますが、依然として全国的に少子高齢化が進み、人口減少も急激な進行に歯止めがかかりそうにありません。

大町市の昨年1年間の人口の動きは、県の毎月人口異動調査によると、343人減少して、24280人となる厳しい状況でした。生まれた赤ちゃんは90人にとどまり、また亡くなられた人は492人で、出生数と死亡者数の差、自然動態で402人減少しました。一方で社会動態では、転出者など910人に対し、転入者は969人に上り、この20年間では初めて転入超過となりました。

市では、平成24年から移住・定住対策に取り組んできており、相談窓口や市の制度を活用して移住する人は、近年大きく増えています。コロナ禍では地方回帰の流れの中、移住者は令和2年度からは毎年90人台を超え、5年度は初めて100人台に乗り、昨年度は111人と、ようやく光が見え始めました。この13年間の累計移住者は887人に上ります。

移住された342世帯を対象に昨年2月、アンケート調査を行い、127世帯に回答いただきました。これによると、出身地は東京を含む関東が約28%、松本市や安曇野市、北アルプス圏域が27%、関西が19%と続き、近隣からの移住も多くなっています。

移住した際の世代では、30歳代が最も多く29%、次いで40歳代24%、20歳代も21%で、働き盛りの世代が約75%を占めています。

興味深いのは、移住を検討してから実現してまでの期間は、との問いに、1年未満が43%、1年が18%で、過半数の人が移住を考えてから「即行動」した様子です。

大町市を選んだ理由は、複数回答で自然環境が54%、北アルプスなどの景観が45%と上位を占めており、移住後の休日や余暇の時間は「減った」の21%に対し「増えた」は40%と、大町での暮らしで大きなゆとりが生まれたことがうかがわれます。

これからも市民の皆さまんご協力をいただき移住・定住対策に力を尽くしてまいります。